

ここ竹山に暮らすことにしてから何かとお世話になっているMさんが、しきりと「石塚さん何か実のなる木など植えないのかい」と言ってくれて、ご推薦のマルメロの木を植えたら、そろそろ実がなるかなという時にネズミにかじられて枯れてしまった話は以前に書いたと思う。その後もMさんは「植えないのかい」を連発してくるのだが、マルメロのトラウマが尾を引いてその気になれなかった。なんせ、ブルベリーなら良い苗を買ってくればその年から収穫を楽しめるが、桃栗三年柿八年ではないがそれなりの果実を得ようと思ったら、そもそも古希の私で間に合うのか。ということだ。それでも同じ年のMさんが、これから果樹園をつくるという構想をもっているいろいろ育てているのを見ると、そう簡単に余生の可能性を自分で閉じてしまうのは勿体無い気もしてくる。

ちょうどそんな時に、コロナで中断していたブドウの苗木の頒布会が再開されるという情報を得た。ブドウの苗木はこのホームセンターに行っても売っているのだが、その頒布会は北海道でワイン醸造の草分けで町立のワイナリーをもつI町が年に一度、一日だけ行うものなのだ。北海道では、比較的温暖なY町などをはじめワイナリーが急増しており、山梨、長野に次ぐ全国三位の数になっている。その草分け的存在のI町だが、冬の最低気温がマイナス二十八度を下回る年もあったほど寒さが厳しいというハンディがある。そのような土地でも育つワインを探し、品種改良を重ねる努力によって「十勝ワイン」というブランドをつくりあげたのだが、それでも課題があったのだ。どうしても冬の間は棚から枝を下ろして雪の下で保温しないと凍ってしまうのだそう。そのたいへんな手間からブドウ栽培農家を救うために、さらなる品種改良を重ね生まれたのが「山幸(やまさち)」と「清舞(きよまい)」という品種だ。いずれも寒さに強い野生のヤマブドウを掛け合わせてつくった品種で、これだと棚をそのままにしても越冬できるのだそう。そして、その「山幸」は、国際認定機関によって日本固有種として三番目の品種登録をされるに至ったという。いわゆるピノ・ノワールとかカベルネソービニオンだとかの品種名と同等にヤマサチが認められたということのようだ。その「山幸」の苗が頒布会で入手できるのだ。これには大いに気が引かれた。

お隣でも食用の葡萄棚があるが、やはり冬になると枝を下ろさなければならぬという。もし「山幸」や「清舞」を手に入れることができれば、枝を下ろさなくて済むのでブドウの生垣ができるのだ。これは、殺風景な我が家の碎石だらけの駐車スペースにもってこいだ。それにブドウは痩せた土地でも育つというメリットがある。大事なのは水はけだが駐車スペースは水はけを第一に碎石だらけにしたのだからうってつけと思われた。それに、苗を植えてから三年で収穫できるようになるというではないか。今のところそれまでは生きていることができそうな気がする。

そうと思えば立つたら頒布会に向けて植える場所を決めて、植える穴を掘るなど準備をはじめなければならぬ。それが、また、大変だったのだ。



第七十七回 ワインのブドウを植えてみる(二)

これまでも穴を掘る機会は数多くあったし、なんせ川と池を掘ったこともある。少々、石があつてもそれをスコップで彫りあげることも慣れてきていた。ところが駐車スペースは碎石を一メートル近く積み上げたところで、とにかくスコップが刺さらない。たまたま妻の実家の物置を片付けた時に出てきたツルハシを興味本位でもらつてきたのが役にたった。これが無ければブドウの生垣は諦めていたことだろう。

まず、生垣の大きさを決めなければならないのだが、ブドウを植える間隔は二メートル。少なくとも一・五メートルは必要ということだったのと、碎石を積んだところとそうでないところの高低差を行き来しやすいように駐車スペースの中間に階段をつくつていたことから、必然的に六メートルというあまり長くないものに落ち着いた。幅は根をそこそこはれるスペースを確保すると六センチメートルということだった。深さは四十センチメートル。体積にすると一・五立法メートル程度なのだ。

しつかり踏み固めた碎石を掘るのは容易ではない。まず、ツルハシを打ち込み固まつた碎石をほぐしていく。それをスコップですくっていく。それを何度も何度も繰り返して穴にしていくという地道で力のある作業だ。「ブドウの生垣、ブドウの生垣」と念仏のように唱えながらひたすらツルハシをふるいスコップですくつても、なかなか穴らしい深さになつてこない。でも、こういう作業は塵も積もれば山となるの言葉通り、いつかは目標に達する。わたしが長年かわつてきたまちづくりなどは、確実に一步一步進むということは殆どなかった。いろいろな要素が複雑に絡み合い、目指す目標に向かって努力はしても進んでいるのか、足踏みしているのか、はたまた後退してしまっているのかはつきりしないことも多くあつた。それに比べると、その都度の成果は微々たるものだけれど、それを黙々と繰り返すことによつて着実に目標に近づいてくるのを目にすることができるのは快感でもあつた。体力的に半日作業を限度としたが、それでも一日五十センチメートルくらいの長さの穴が掘れる。二日で一メートル。休みも入れて一週間でなんとか目標の大きさの穴を掘りあげることができた。

つぎは、その穴に水はけの良い火山礫と、黒土と腐葉土を混ぜながら埋めもどす作業になる。腐葉土はホームセンターで買つてくればそれまでだが、なんせ敷地にはタダで積もっている落ち葉が膨大にある。それをかき集めて運んで埋める作業を繰り返す。掘るのもたいへんだけど、埋めもどすのも結構体力を使った。それでも雪が降るまでにはなんとかブドウの苗を植えられる環境が整つてきた。あとは、頒布会のある来春のゴールデンウィークを待つだけだ。

妻はブドウの生垣をつくるのにさほど反対はしなかったが、どうせ碎石だらけのところブドウを植える穴を掘れるとは思つていなかったのかもしれない。それでも、「これで、我が家はお金がなくなつてもお酒には不自由しないよ」と、つまらん冗談を言つて妻の気持ちが変わらないように祈つていた。



頒布会は朝からなので妻と前泊して臨ことにした。晩飯は地元の牛肉に十勝ワイン五種飲み比べセットということで気分を盛り上げる。それにブドウの生垣の仕立て方を見ておくということも役場にある生垣の構造、スケールなどを実測したり写真に収めたりした。頒布会は九時からだけど八時半に行くともう人の列ができていた。苗は「山幸」「清舞」の他、「清見」の三種。事前にご近所さんと相談し、それぞれにブドウの生垣をつくってみようということになっていたのでも、それにきつかけをつくってくれたMさんへのプレゼントも加えて、「山幸」七株、「清舞」四株、「清見」一株をいただくことにした。

私が購入の順番を待っている間、妻は誰かと話している。どうも地元新聞の記者のようだ。ちよつと悪い予感がして購入後、話の輪に入ってみると記者曰く「奥さんから聞いたらワインを造られるんですって？」と。妻の気持ちをつなぎとめておくためのホラを真に受けて、それも新聞記者に話すなんて。あわてて、それは冗談で生垣用に購入して、もし収穫があれば生食でもいけるそうだし、ジュースやジャムにして良いかと思っていると訂正した。その後が気になつて帰ってからしばらくしてその新聞のインターネット配信にアクセスすると「町でブドウの頒布会に多くの方が来られて賑わう。遠くK市から来られた石塚さんは・・・」とあるではないか。その先を読むのは有料ということではなつたが、その先を読むのが怖くてなかつたことにした。数年後に国税の方が無駄足を踏まないことを祈る。

苗は、ご近所やMさんにたいへん喜ばれ、さつそくそれぞれで植えて「三年後が楽しみだね」と笑顔をかわした。七十過ぎの老人たちが、三年後が楽しみだと言ひ合うのも良いものだ。それからは、時々「散歩の途中」とか「元気にしてるかな」とかの理由をつけ、互いのブドウの生育を確認し一喜一憂すること。それでもMさんは我が家のブドウに大きな芋虫がいるのを見つけてくれたり、施肥のタイミングなどいろいろアドバイスをもらえて感謝している。秋になり選定にも気を配りながら、ネズミやスカシバの幼虫などから苗を守りブドウの実がなるのを楽しみに待とう。

そうやって日々、ブドウの成長を観察していると、敷地のなかの見え方も違つてきた。そう、そこら中にヤマブドウが生えていたのだ。灯台下暗しというより、ブドウを見る「目」ができてきたという方が正しい。いままで笹藪の中に埋もれていた、高い木に絡みついて地上からは気がつかなくなつたりしたのが見てわかるようになった。そのままでは勿体無いので、笹藪から引き出し支柱を立てて第二第三のブドウの生垣をつくった。あちこちにブドウの房状の花が咲いて、三年待たずに収穫が楽しめるかと期待された。ただ、だんだん様子がおかしくなりその花が枯れていくではないか。いろいろ調べたらヤマブドウには雄株と雌株があり、私が見つけたのは全部雄株で実がならないことがわかつた。その落胆ぶりを見かねたのかMさんが高いハシゴを持ってきて高い木に絡みついた雌株を地上に下ろしてくれた。

